横丁通（札幌本府通）＝現在の米里行啓通

水に浸かる本通から外れて横丁へ この道が初の札幌への道になった

現在の旧横丁通。店に横町の名を見ることができる

札幌へ 行く道がほしい

明治４年(1871)に白石村に最初の移住者が入植して以来、札幌本府との連絡は望月寒川沿いの細道をたどり、月寒街道（今の国道36号）を利用するのが唯一の方法だった。江別道路(国道12号）ができたのは明治22年である。

翌明治５年、春の融雪とともに低湿地帯の居住者は家の中まで水に浸り、生活不能な状態になった。そのため18戸が横丁（現在の米里行啓通）沿いに移転した。村の形態が整い開墾作業が進むにつれ、村内の道路を往来する車馬も増え、札幌本府への交通路が必要となった。

旧暦明治5年2月、貫属取締・佐藤孝郷は開拓使に願書を提出している。

「-- だんだん雪どけになり一番大事な村の道路が無く、水たまりや水の流れる沢地に橋を掛けなければ通行にも不便です。何とか市街地への通路や村内往来の道を作ってください」

馬の股までぬかる道

この請願を受けた開拓使は明治5年4月から 5月にかけて工事を行っている。その内容は、白石神社から横丁通を通って今の国道36号に至るまでの全長 2,588間(4.7キロメートル)、幅５間(9メートル)、総経費 3,016円97銭 2厘を必要としたことが、「開拓使事業報告」に記載されており、この道路が最初の札幌－白石間の連絡道路となった。この5.1キロ区間を札幌本府通といい、そのうち現在の白石中央1条3丁目の角から国道36号までの区間を横丁通といっていた。

当時の施工方法は現在と異なり盛土程度のもので、４年後には次の請願がされている。

「白石村が開村して４年たちましたが、まだ札幌町まで行く本格的な道路がありません。雨が降るとぬかるみとなり通行がむずかしくなります。村中の者で修繕してきましたが、ぬかるみでは足をとられ、ひどい所は馬の股まで達するところもあって、交通に不便をしています」

また明治９年(1876)の北海道通覧の記事に

「毎年雪が降るたびに村中が総出で豊平まで雪道を開いて通行したが、他の人の足跡を見ることはほとんどなかった」

とあり、村人にとって主要な道路だけに維持管理には大変な苦労があったようだ。

東札幌町連30年史座談会での雲田藤助さんの話では、

「大正 8年(1919)ころは、道路の脇を流れていた２号用水が春先の雪解け水や大雨が降ると氾濫しました。路盤が悪いから毎年豊平川から採った玉砂利をいくら入れても、しばらくすると沈んで影も形もなくなるんです。雨のときは泥んこ

標示板の場所

道を避けて田の畦（あぜ）道を歩いたこともありましたね」

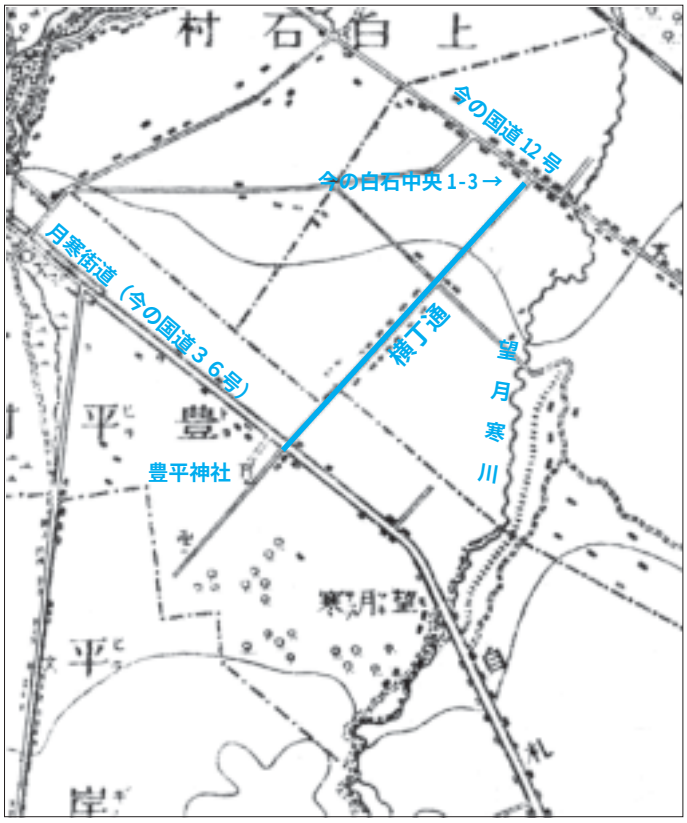
ちなみに江別道路（国道12号）は明治22年(1889) 8月着工、23年11月竣工（しゅんこう）の砂利道で、（中央区）北１条東４丁目から上白石村と白石村を経て江別に至る17.7キロメートル区間だった。

またこれに付随する東橋は明治23年に架橋された吊り橋と板橋で、豊平川の増水時にはたびたび流されたが、この道路のおかげで、豊平橋までう回せずに札幌市街と往来することができるようになり、当時の白石・上白石の村民には非常に喜ばれた。

（武田清晃）

※「横丁」は「横町」とも呼ばれた。地形図では大正５年版には「横丁」、昭和10年版には「横町」と記載されている。

横丁通（昭和23年頃）



明治29年の５万分の１地形図（部分拡大）

大正５年の５万分の１地形図（部分拡大）